

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年
11月号

通巻 567号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



成正坊成賢大善神のお社 あじさい邑 矢追房子さん撮影(文・4頁)

平成元年(1989年)4月2日 「藤の木の話を聞く会」講演より

神武東遷の聖蹟顕彰運動の話(下)

於：藤之木公民館

法主 矢追日聖(満77歳)

『金鶏の黎明』を発行

今ここに來ていらつしやる皆さん方を見た時に、知らない人がずいぶんいます。ほとんど藤の木の人だけだろうと思うし、それが昔の話をしてくれないかというようなお招きを受けて、私にしてみれば意外な喜びがあります。とても嬉しいんですよ。

これは私の郷土愛というかね、藤の木はそれだけの価値のある場所やし、何とかして顕彰運動をしたいという気持ちがございます。そしてある程度の可能性を、ここ奈良県の北の方に持って來たんですよ。

『金鶏の黎明』という本を出しましてね、学問的立場の理屈で、一番先に桜井の伝説地を全部否定してしまつたわけ。だから悪かつたけど、正面衝突という形です。そうすると聖蹟そのものよりも何か地方同士の取り合いのような、政治的な運動になつてきたんですね。

私は南の連中に随分怒られましたね、裏からの政治力でもって県の学務部長と県警の部長の名で、大倭神宮の撤去命令が來たりしたんですよ。生駒の警察から署長や人が來て、「矢追さん頼むわ、いったん公文書が出た以上、毀さないわけにいかんや」と、灯笼をみんな下ろして、ちよつとゆがめてくれたら撤去と認めるからとやうて、それで引き上げてくれました。あくる日には石屋を呼んでまた建てたんですがね。(※野草社刊)な

がそのの息吹』150頁「大和での聖蹟顕彰運動」に詳しい)

国の方でも、決定するのに困ったんですわ。結局、政治的決着になって、金鶏発祥の地は北倭村・富雄村地方、鳥見山中の靈時れいじは桜井の鳥見山というように、南と北に分けて内務省は発表したんです。学者の間で矢追さんの説が正しいのではないかと認めてくれて風向きが北に良くなったらしいんですけどね。

これは、私にしてみれば嬉しかったです。この土地に決めてもろて人寄せして発展しようなんてことは考えてないし、信仰の立場で言うてるんやからね。どうもその時、県庁に南の派の人がいて、撤去命令を出すような形になつたらしい。

この事件からたしか百日も経たなかつたでしょうね、その県庁の人は首括くわって死んだと思います。罰が当たって死んだんと違いますよ。誤解せんといて下さいね。家庭の事情とか県の中でも色んな問題が暴露してきたというような現実の話なんです。まあそんなこともありました。

しかしまあ村でも六十歳以上の人は知ってますけど、うちの大倭神宮ではね、私の父親の時代からその後私になってるんですが、もう何か知らん罰が当たるといふか本当にややかしいことがありました。

藤の木という名前の由来

さつきも言うた土地の古老に聞いた話では、今の倭神宮のあそこにはね、古い藤が沢山あったらしいわ。うちが屋敷をする時に藤を大分伐つたということを書いてますけどね。

聖徳太子がこちらにみえた時、その藤の木に馬を繫がれたというんで「藤の木」という名前にな

つたというんですね。聖徳太子が河内で物部守屋との戦いに敗けて、鳥見谷に出て来て祈願されたという謂れなんですけど、同じ話が真弓の長弓寺にも伝わってます。まあ伝説のことやから、同じ谷筋やしあつちにもこつちにも同じ話があるんやろなと思います。

だからして伝説というものを考えたら、金鶏が飛ぶというようなことも、今考えたら飛ぶはずがないけれども、『日本書紀』に書いてあるんやし、鳥見という地名もあるんやし、何かを言い伝えていくということですね。

『日本書紀』を書いたのは、お抱えの学者だし天皇の側の人ですけども、九州の方は瀬戸内海から来て、第一回目は生駒山を越えて鳥見のナガスネヒコ(※以降、ナガスネヒコとする)の本拠に直接入ろうとして、日下の戦いで負けたと書いてます。あまり死んだ人が多かつたので海の水が赤く染まつたから大阪湾が茅渟ちゆうの海という名前になつたという伝説があるくらいポロ敗けやつたの。五瀬命いつせのみことという総大将は、矢に当たって和歌山の籠山かごやまという所で亡くなっています。(※神武天皇の兄弟は四人。五瀬命は長兄、次男・三男も熊野灘で荒波に飲まれて行方不明、四男で後の神武天皇が辛うじて熊野から上陸した)

第二回目に鳥見に出て来た最後の戦さの時にも、「連に戦ひて取勝つこと能はず」と、日向の人達はナガスネヒコとの戦さで連戦連敗だったということを書いていきます。

その時に「忽然いつぜんにして天陰あまのくもりけて氷雨ひこふるふる」、天が真つ黒けになって、水の混じつた雨と言うんだから雷が降つたんですね。そうして「金色の靈あやしき鶏有りて、飛び来りて皇弓みゆみの弭とまに止れり」と、金色の鶏が飛んで来て神武天皇の弓の先に止まつたと言ふの。その鶏が光り輝くことによつて戦い

が収まつたと書いてあるんですね。ナガスネ軍も九州の兵隊も、眩くらしかったのはどつちも同じはずやけど、神武天皇の方に肩を持った書き方してますわね。(※岩波古典文学大系『日本書紀』により補足)

戦さが終わって(第一代として即位した)神武天皇に、北の鳥見の方はなかなか従わなかつたんですが、四年くらいかかってようやく北の方へ来ることができるようになりました。神武天皇は、金の鶏のお陰で助かつたんやから、その土地へ行って皇祖天神にお礼を申し上げると言つて出て来てお祭りをされたというのが、「鳥見山中の靈時」なんです。靈時とは祭りの庭、神祭りをする場所ということ。『日本書紀』にそう書いてあるんで、「鳥見山中の靈時」は金鶏が出てきた場所にするのが常識として考えることなだけけど、結局は政治的になつても桜井に決められました。本当を言うたら、話が合わないんですよ。

アホを見たのは榛原宇陀の方やわな。運動にずいぶん金も使うたやろけど、駄目やつたわけ。『日本書紀』に書いてる日にちを太陽暦に換算すると金鶏の出た日は十二月四日、神武天皇がお礼のお祭りに来られたのは二月二十三日なんです、その日に大倭神宮では祭典をしていますけれどもね。

まああんた達には別にね、こんなことがあつたという昔の物語として聞いてもらつたらいいんですよ。

金の鶏が出たというようなこと、歴史的に根拠も何もないんですよ。けれども、千三百年ほど昔の人達が、鳥見という所から金鶏が出たんやという、その言い伝えをね、尊重してほしいんです。言い伝えというものは理屈で考える問題じゃない。理屈抜きで素直な心で伝説を受け取ってほしい。

地域の人達へ恩返し

私は藤の木で生まれ育った人間だけれども、昭和十四年に庄山の方に移りました。その時は、藤の木や大和田の皆さんに手伝ってもらってね、土地の皆さんにお世話をかけました。私が、金鶏発祥だとかあんまりやかましく言ったために、みんなを騒がしたと、それは罪やつたと、今でも思っています。(※最初の司会者の話によると、「金鶏発祥地・鶏靈時聖蹟 鶏峯頭場 大倭鶏龍会々員」なる協賛会が結成されていたし、檀原神宮の造営にあたり立ち退きなどがあつたので、もし金鶏発祥の地に決まったら同じようなことがあるかもしれないという思惑が土地の人の間であつたりしたらしい)

地域の人達にいろいろ恩を受けていますのでね、自分の能力の範囲において地域の人達に対して何かの利益になるようなことをして、この世を去って行きたいというのが私の念願なんです。

終戦の直後、昭和二十二年から今の住まいである菅谷の方に行きまして、社会福祉の仕事をして、病院も作りました。私個人が有名になろうとか、矢追の家を宣伝しようとか、そんなことは毛頭思っておりません。だから病院ひとつにも矢追とか個人の名前は絶対出していません。「大倭」というのは、日本の国ということなんです。その点、皆さんにもよくご理解願いたいと思うんです。まあ私は、頭がだいぶん巻いておる方やから氣違ひじみているんですね。世間の人の言わないようなことも言うし、人のせんようなこともやります。けど、私の気持ちそのものは人の喜んでくれる、人のためになることを考えています。人をかき落としてでも自分が儲けようとか、人と争うと

か、そんな根性は全然持っておりません。藤の木出身であれやこれや事業で発展されている方もおりますけど、私は私で社会福祉という一番地味な仕事をやっておるわけです。

矢追家の歴史

土地の人が鳩の峰と言つても、私の口では鶏の峰と、こう出てくるんです。どちらでもいいんですが、鶏の峰の裾には、「杜さん」がたくさんあるんですね。神祭りをした場所を杜さんと言っています。(※幾つかの具体的な場所を話しておられるが、聴き取りにくいので、野草社刊『ながそねの息吹』259頁より引用して補足する)

「この近くには神罰を恐れる杜さんが数ヶ所に点在しているが、鶏嶺の西南麓にある大きな杜さんは水で流され、今は川の南に遷座した旧村社葛上神社の神地であつた。また大倭神宮から東一キロの地点、白砂川の東丘陵にある森山(旧神社址)からは、奈良朝頃の埴製皿の破片や、祭祀用の小型土馬などが出土して、このあたりの古代の匂いをただよわせる。」

現在大倭神宮になつている所も矢追本家の屋敷でしたが、怖い杜さんであるというので、そっと置いてありました。

それで、私個人の話になるんですけど、矢追の本家を私のお祖母さんが養子をもらつて継いでおりました。跡取りの弟の年があんまり若かつたのでね。ところが弟がだんだん大人になりましたね、明治三年の時に隠居して、怖いとこやけどその杜さんへ分家を建てることになったんです。

というのも、富雄川に橋を架けるのに、この杜さんの木を伐れというお上からの話があつて、同じ伐られるならというわけですね。一番中心にな

る松の木は極楽寺に献納して、それで観音さんのお堂が大体出来たというくらい太かつたらしい。杜さんの木を伐り払って祈祷もしてもらって、新しい家を建てたんやけれど、お祖母さんの話だと、白い物を着た人が出て来てパーンと足で枕を蹴るので怖くて寝ていられない。十年間住まいできなかったらしい。だから上の子三人は(一人は夭折)、本家で生まれているんです。

杜さんに建てた家で初めて生まれたのが、私の父親です。ところが長男が死んだから結局、跡取りになつてもてね。あそこの家ではもういろいろな怖い話ばかりで、私は子供の時分からずと聞いて大きくなりました。牛の糞を屋敷の隅に鍬で掘って埋めたら一週間腰が立たなかつたとかね、とにかく罰が当たつた話がようけいあります。

ナガソネヒコの住居地

そういう杜さんが多い所やし、鳥見谷の地形から見ても藤の木ほど良い所はありません。北倭から始まつて伝承のある場所を全部見てきたんですけどね。昔は、ここのお地藏さんの前(※藤之木公民館の隣りにある)まで富雄川が来ていた。だから岸上という地名が残っているし、岸上の上は神さんに通じるし、ナガソネヒコの時代にはここで神祭りしたんやかと私は考えました。

そこにまた陣屋の井戸というのがあります。あそこはものすごく豊富に水が湧くんです。古代の人が住まいするのは、水が良い場所なんです。そんな意味でナガソネヒコの住居地にまちがいないだろうと、これは私の想像ですけど。顕彰運動する時には一つの拠点というものを作らないといけない、分らないというようなことでは話にならないわけです。

陣屋という名前は、郡山藩のツナミトクサプロウ(か?)という旗本が住まいして陣屋があったからですが、昔は「彦谷の井戸」と言うたんです。彦はヒヨコ、谷はダンとなまって「ヒヨコダンの井戸」となったりしました。

この谷筋では、谷の付く地名が多いんですが、どういいうわけか谷をダンと言うの。黒谷はクロダンやし、今、東ゴダンと言うてることも、土地の台帳とか見たら東彦谷と書いてあるんですね。

まあ今シャシャ川っていう川がありますね。あれも白砂川がなまってるんです。白湯というように白はサと読むことがあるでしょ。その川には、私ら子供の時にはジャコ捕りに行つたもんで。寒い冬になったら水車が停まって氷柱が着いてんの。それを金づちでカーンカーン割って取つたも

表紙写真から広がった 成正坊塚の謎

杉本 順

秋にふさわしく舞い降りた銀杏黄葉の絨毯、ほんとに見事です。毎年忘れず絨毯を敷いてもらえるのも自然の恵みです。

大倭会館の左側に神庫(二祠)が在るのはご存知でしょうか。この祠は、毎月23日の月次祭に拝殿祭典後の四神参りされているうちのひとつです。その奥に成正坊さんの塚があります。

この塚の周りは大倭の土地ですが、どういう訳か八坪ほどだけ長年所有者不明で誰も手をつけられなかったのを、後に大倭で買取されたとのことでした。

昔、生母さん(法主さんの母・日妙師)がその塚に生えている蕨を食したところお腹をこわされたとのこと。この話は邑の伝説みたいなものです。今は祠の中に、この社殿創設の由来について法主さんが書かれた立て札があります。

んです。それを牛でゴロゴロ、白挽きはつた時に、糞がぎょうさん積んでますやろ。糞の中に置いといたら、氷がもつと思つてね。けど行つて見たら水になってしても何もあらへん。そんなこともありました。

私の母親なんかシャシャ川に行つて、オムツ洗つたり、着物なんか足で洗つてね。野菜物も洗つてました。今の新池のところがちよつと広くて浅い溝がついてたから、そこで。

藤の木には子供時の思い出がいろいろあつて懐かしいですねえ。

(※他に地元の昔話を幾つか話しておられますが、法主様の弟の矢迫隆義さんが「登美谷の名残」平成13年5月号第1回〜14年11月号第10回で書いて下さったものを(参照下さい) 文責・編集部

そこには、

成正坊成賢大善神

昭和二十五年八月二十八日

日妙師開顕

裏面に

平成五年八月三十一日竣工之日社殿創設

老人有料ホーム

為施設守護 日聖八十二歳

とあります。

この人格霊は大変怖い方だと聞かされてきました。法主さんが成正坊成賢大善神と名を付けて、祠の形でおまつりしようかと言われても、中々納得されなかつたとお聞きしています。

平成5年8月この塚の隣に「有料老人ホーム エステイムライフ学園前」が建設され、その竣

工式の日にあたる8月31日をもってこの施設守護のお役目をいただき、祠に祀られることを納得されたのでした。社殿の中の立て札にはこのことが書かれてあるわけです。

また、昭和25年に日妙師が開顕された時の内容というのは、

「大本宮の北西の隅の畑の中に塚あり。この塚は、光仁天皇の皇子、成正坊成賢の墓地と明示あり。成賢は豪者、謂ナマクサなるが故に仏道に入り、須加谷寺の住僧となる。」

というもので、法主さんの遺品を納めた拜殿東側のプレハブ内で平成26年に発見した御遺稿やメモに記されてました。本紙平成27年12月号「大倭大本宮伝承の紀 三」で既に紹介されています。

成正坊さんの祠の正面には大きい大倭教の丸二の紋章があり、その上に小さく菊の御紋があります。成正坊さんが光仁天皇の皇子であると聞いた大倭の宮大工である山崎正知さんが自ら菊の御紋を作られました。社殿の完成を見に来られた法主さんが「おお、菊の紋をいれてもらいよつたか」と言われました。この菊の紋章のことは法主さんは知っておられなかったようでした。

今月号は季節の写真で表紙を飾るといいうぐらいのことで始まったのですが、撮影者の矢追房子さんが法主さんから聞いていた「成正坊は光仁天皇の子やな」の一言が、単なる風景写真という以上の、成正坊塚の謎に向き合うというきっかけになりました。

天皇家の系図や日本史人物辞典、日本史年表なども参考にして調べていくと、この怖いお方が誰なのかと気になる方が見つかりました。そのことは次回に書きたいと思えます。



南の島からいんにちは

鹿児島県大島郡瀬戸内町

梨花

拝啓、京都から奄美群島の加計呂麻島へ移り住んで半年が経ちます。

一年前のいまごろ、李章根さんに誘われて二度目の訪問となった大倭での関野吉晴さんの講演が、こちらへ来る後押しにもなったことを思い返します。示唆に富む話の中で特に印象的だったのは、人類は他の動物と異なり、進化ではなく「文化」で、適応し生き延びて来たというくだりです。そしてまた、所有という概念が争いや差別を生んだ発展の仕方とは別に在る、太古の昔からいままお受け継がれているアマゾン狩猟民の「優しく慎ましくゆったり」という生き方の基本に、瀕死の地球に暮らす「文明」社会の一員である私たちは学ばねばならないと思う、という辺りが心に響きました。

と書いたものの、奄美の暮らしがアマゾンのそれに近いわけでも、私が関野さんの千分の一ほどでも自分の手足と頭を使って大地とともに日々を過ごせているわけでもなく、当初の思いとのギャップや、自分の変わらなさに落ち込むことも正直多々あります。

こちらに来て最初に感じたことは、鳥の声の美しさです。リュウキュウアカショウビンという名の鳥がなんとも心地よいリズムと音色で朝から極上の音楽を奏でてくれるのです。

鳥の他にも色鮮やかな昆虫や蝶、トカゲに、野良猫、人間は少ないけれど、「何て生きものが多いんだー」と思ったと同時に、街の生活はその

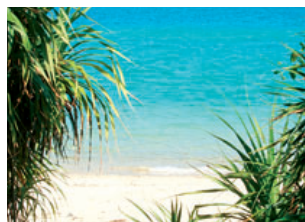
生きものたちを追い出してしまつたのだと気づかされました。視点を小さな生きものに移すと、時間の流れもゆったりと感じます。借家から徒歩十数秒の海辺に出ると、日が沈んだあとはヤドカリたちが集団で動き出します。私はまるで三歳児のようにしゃがみ込んでじーっとその動きを追いかけ、いま、という瞬間を味わいます。

植物も南の島は生命力溢れていて、成長著しく、「あー、彼らも生きてるんだな」と当り前のことを思い知らされます。島の人に食べられる野草を教えてもらったり、お茶にして飲めると聞いてからは、月桃の葉とグアバの葉や桑の葉とのブレンドティー作りが毎朝の日課になりました。また、パイヤの木はそこかしこにあり、青い実を時折折頂くと、黒糖漬けにしたり、みそ汁の具材や炒め物、酢の物にと万能選手として重宝しています。

来てすぐの頃、潮干狩りに誘われ目の前の海からちよつと奥まった場所へ連れて行ってもらいました。ビギナーとベテランの差は一目瞭然で、島の人たちの目のよさと勘所の良さには完敗です。サザエを一つ採ったことで大騒ぎの私の横で、娘は黙々と飽きずに目を凝らしては借りた道具を使って貝取りに夢中になっていました。収穫量は微々たるものでしたが、海水浴の場としての海しか知らない親子にとっては貴重な体験です。本土の海とは青の深さと透明さが段違いでため息が出るほどですが、島の人は、採れる貝や魚も減つたし、海も昔に比べて汚れてきたと言います。

自給自足には程遠い、大半はお店で買つての食事はありますが、少しずつこうした機会が増えていくことで、暮らしはローカル、思考はグローバルという意味を実感していくことでしょうか。

ローカル食といえは、これも来てすぐの頃ですが、こんなことがありました。まだ知り合いも出



来ず、寂しさもあり、娘と二人で散歩でもと海辺を歩いていたので、遠くの方で数人集まっている様子がかがえました。「なんだろう、楽しそう、行つてみよう」と小走りに行く娘の後を、遠巻きに会釈だけして通り過ぎようと気遅れしている私に、中の男性の一人が手招きをしてくれました。魚でも捌いているのかと近寄ると、捌かっていたものは魚ではなく、なんと猪でした。

毛は筆られていて、ちょうど首を切り落とすところで、数人の人が入れ替わり立ち替わり部位を切り分けていく、その見事な包丁さばきを、興味津々で娘は見入っていました。以前、京都の郊外で鶏を絞めて食べる会に参加したときは、厭がって場から離れ、出来あがった鶏料理を口にしなければならぬのに、その時は、七輪で焼いた猪肉をこれでもかというぐらいに頬張っていました。実際、島一番の畏仕掛け名人が捕つたという琉球猪は、本土の猪より小ぶりで新鮮さもあいまつて、とっても美味でした。

日本各地どこでもでしょうが、いま、暮らしの知恵や伝統技術を継承してきた世代が鬼籍に入る、ぎりぎりのところなのだ、こちらに来て尚更に実感しています。豊年祭の土俵の設えの縄を編める人も、八月踊りの歌を歌える人も、追い込み漁の担い手も、黒糖作りの過程から酢を作ることも、出来る人たちはどんどん減っています。

「こんな何もないとこによく来たね」と島の人に言われる度に、「いやー、それがいいんですよ」と答えています。でも本当は、「何でもあるじゃないですか」と答えるべきでした。

街の、消費社会が主流な視点から見れば、「何もない」のでしょうか、生きるに必要なものは、こちらの方が豊かです。もっとも、「何でもある」から、「あった」へ変わる状態への危機感もあります。

こちらにUターンしてきている私と同世代の人の話では、こどもの頃はほぼ自給自足だったそうです。紬の機織り機もどこの家にも置いてあったようですが、いまはそのかげはありません。

一番大きな変化は稲作をやめたしまったことでしょうか。いわゆる「減反政策」の中で、奄美大島全体を見てもほんの一部でしか米作りは行われなくなっています。

重要無形民俗文化財に指定されているアラセツ行事（シヨチヨガマ・平瀬マンカイ）で有名な秋名という集落も、内外から訪れる四百年続くその行事を守るために、かろうじて田圃を続けている状態だと聞きました。

私の住む所も、田圃がなくなつてから台風被害が大きくなつたとか、トンボや虫が減つてしまつたとか、豊年祭で配るおむすびも茨城産のお米でしたし、食する「米」そのものが途絶えるだけではなく、自然形態の変化や、祭りも形骸化されてしまうという一面に触れ、複雑な思いがしました。

なくなつてしまうものへの愛着は土地の人が「何も無いこと」へのコンプレックスからか、郷愁を感じる以外に価値を置かなくなつてしまつていくのとは逆行して、よそ者にとってはそれが魅力となり、いわゆるUターンと呼ばれる人たちが徐々にではありますが増えているという現実も片一方で生まれています。

彼らにとつて、それは私にとつてもあるのですが、かつて「あった」ではなく、いまでも「ある」ことの有難さを痛感するからかもしれません。「結いの精神」と呼ばれるものです。

損得勘定なく、お互いが支え合う関係があり、下の名で呼び合うぐらゐ親しげなので、はじめは、皆が親戚関係なのかと思つたぐらゐです。

三万年前から人が住んでいた形跡はありながら、琉球や薩摩支配以前の奄美の歴史はよくわかつてはいないそうです。「島」と言う閉鎖的なイメージを持つかもしれないけれど、奄美は交易・交流の拠点でもあり、外に開いていたんだよ、いまでいうコミュニケーション能力に長けた平和な民が共存して暮らしていたんじゃないかな、という意見に頷けるのは、奄美に来て厭な人に会つたことがないからです。一様にみない人なので、集落の一人ひとりには言うに及ばず、役場の人、船長さんやバスの運転手さん、店員さんなど、なんというか厭な気持ちにさせられない、あつたかい、心の広い人たちなのです。

また、最初は当然のように家に鍵をしていたのですが、「へー、鍵しているんですか」と言われ、ここでは必要ないのかと、いまでは鍵はしていません。なので、留守の時は宅急便の荷物がドアを開けた玄関に置かれていたりします。

その警戒心のなさが仇になったのだろうか、と思わずにはいられないのが、南西諸島への自衛隊配備計画です。基地建設工事は、着々と進められ、その実態と内容を知つたのは、恥ずかしながらつい最近のことでした。

十月に入り、急に上空を行きかう航空機が増え、騒音被害もありますが、何より、それが一体何なのか、自衛隊の？ 米軍の？ 合同訓練？ と、昨今の戦争モード全開の安倍政権への不安もあり、役場に問い合わせてみたところ、何とものを得ない返答だったので、情報検索しているなかで、信じられない「現実」に出合つたのです。

よくぞ残つてくれたと思つていた風光明媚なその場所に、環境破壊を防ぐため裁判を起こしたり、一般観光客の立ち入りを制限したり、住民の積み重ねた努力によって保たれている美しい自然のその場所に、いとも簡単に戦闘機が入り込もうとしている、そしてそのことをここに暮らす人たちは殆ど知らない、知らされていないことに驚愕しています。

もし戦争が長引いていたら、沖繩の次は奄美だったかもしれない。当時、三種類の防空壕が作られ、一つは各家用、もう一つは遠隔地用、そして第三の避難壕とよばれたのが、集団「自決」用、これは軍からの命令で部落の人たちの手で掘られたということです。もっともこのことは奉安殿や弾薬庫ほどには戦跡として伝えられてはいませんが。天皇制とは無縁の歴史が長かった奄美で、鹿児島県下だからか、学校で日章旗が生徒自身の手で日々揚げ下げさせられているという事実をどうみたらいいのでしょうか。

軍隊は住民を守らない、という体験を経てそれを教訓としてきた沖繩との差を感じます。

しかし、その警戒心のなさを責めるのは筋違いで、ずかすかと土足で入り込む方が悪いのであって、侵略されても侵略したことはない歴史を誇りに思うべきでしょう。だからこそ反対の声をあげて内外と連帯する道を探つて欲しいし、私も共に歩きたい。

アマミノクロウサギのような原種、そう、奄美の人たちは「争いを好まない平和な人」という意味で、アマゾンに暮らす、人間の原種に近い存在なのかもしれません。

『われわれはどこから来て、どこへ行くか』という問いかけを、関野さんの講演の問いかけを反問し続けたいと思います。どうぞ皆さまお元気で。

寸 紗

第127回

筒井 則子さん

ちよっとした愛情

大倭安宿苑の長曽根寮、菅原園で二十七年間介護職員として勤めてこられた(七年前退職)筒井則子さんは、長曽根寮での七不思議といって、大倭らしいこんな話をしてくれました。夜勤中に多かつたようだが、筒井さん達が歩くと天井でも足音がし、立ち止まるとびたりと足音も止む。職員が一人が、食堂にちいさい子が一杯おるのが見えると言って驚いたり。私は筒井さんに看取ってもらって死んでいくねんと話していた住死者を筒井さんが自ずと看取る事になったり。静養室で壁にもたれながら、「今日はあのおばあちゃん気つけなあかんなあ」と他の職員と話していると、ふと「あっ息切れた」と感じて行くところを起こしていた等。筒井さんの記憶に生きる人々がどんな人だったのか、どんな関わり合



いをしたのか、語りの中からディテール(細部)が蘇ってくる。「元気な人もそうでない人に対して、ちよっとした愛情でその人が喜ぶ事もある。うまく意思疎通できたらいい介護ができると思うんです」則子さんは、昭和二十三年奈良県生駒郡北田原、岩船神社の近くにあった母方の実家で、四人兄妹の長女として生まれた。戦前、神戸製鋼に勤務していた父親の宮市さんは、戦争から帰還して体を壊し、則子さんが幼少の頃に帰幽されたので、軍隊時代の写真でしか記憶がない。「まあまあお父ちゃんおしやれで男前やねんなあ」

父方の祖父父母が愛媛県の大三島に暮らしていたので、ちいさい頃は瀬戸内の島々をよく巡った。小学三年から二年間は島の学校に通い、「入港してくるエンジン音で船名の当て合い遊びをしたり、食べ物ではもち米と小豆に、夏場に干しておいた白いさつま芋を入れて炊いたカンコロ飯を初めて食べた時はほんまにおいしくて、つまみ食いにとまらなくて怒られたなあ。郷土料理やね」。

生駒に帰り中学を卒業した則子さんは、高校に進学したかったが、母親のかづゑさんと家計を支えるため、東大阪の千代田紙工に就職。「働きたしたら結構楽しかったです。会社から慰安旅行や花月に連れて行ってもらったり。花がきれいやから、クラブでは華道を長く続けて師範の御免状を戴いて、楽しかった」

八年八月勤め退職。二十四歳の時、神戸で左官業を営む修さんと結婚。十年神戸で暮らしている間に二人の娘さんに恵まれた。二人目を出産後、半年程体調を崩したのと修さんの仕事が職人ゆえに天候等で一定しないのを機に、則子さんは新たな仕事を模索し始めた。妹が安宿苑で勤めていた事もあり面接を受け長曽根寮で働く事が決まったのが則子さん三十五歳の時。慌てて生駒の母親の近くに引越した。面接官は当時寮長の矢迫隆義さん法主さんの弟である。「福祉の仕事はボランティア半分、普通に働く事半分の気持ちで働いてもらわないとあかんと思います」と言われる。「確かに半分はボランティアやっ

たと思う(笑)。どんな仕事なのか関心はあったが、いざ始めてみるとこんなにしんどいとは思わなかった。「苦しかったら苦しい程意地になってね。でも、そんな思いしながら動いていた時代が華やったかなあ。ちよっと手がすいたら掃除機でも掛けたた古い建物やっただけど、きれいですねと言われた。住死者やボランティアに教えられる事も多かったです」。法主さんは、「来る者拒まず」と言われていたので、厳しい状態の人は最後には長曽根寮に話が来て受け入れるという流れができていた。隆義さんは、「どんな苦情があっても僕が全部受けるから、あなた達は相談しながら仕事を進めてくれ」と言われ、「私達が仕事しやすいように仕向けてくれたから、厳しい人やつたけど安心して働けた」という。菅原園に異動になり、住死者が楽しめるよう、ボランティアにお願いして、お花を一緒にいけて楽しんだ。今、修さんは長曽根寮のデイサービスでお世話になる事ができ、夏頃から則子さんの体調や生活も少しずつ楽になりつつある。「トンネルを抜けたかなあ。うまい事切り抜けていかなしやあない」

「9月に娘達が奮発し家族旅行をプレゼントしてくれ、いい思いできてよかった」(聞き手〓李章根)

あじさい日誌

10月15日 大倭神宮月次祭。大雨のため祭典は社務所で執り行われました。

石垣雅設さんの案内で31名の方がバスで来られ祭典に参加。教長さんが紫陽花邑の子供時代の話を読みました。夜は大倭会館で1泊、神人さんのコンサートも行われ、翌朝杉本順一さんと話し合いの場を持って解散されました。

午後4時から拝殿で大倭会の文化講演会の準備会。
10月21日 午後、交流の家でFIWC定例委員会。現在、委員長不在にて大募集中とのこと。
10月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は平成5年10月23日の法話をお聞きました。(平成22年10月号『とおやまと』に「社会福祉を宗教から考える」として掲載分)
10月29・30日 大倭会秋の一泊文化行事。参加者の約半数は奈良方面から学園前駅集合で団体行動し、新大阪駅や広島駅で合流しつつ最終的に22名全員が無事そろい、ヒロシマピースボランティアの多賀俊介さんに出迎えて頂きました。また台風22号が接近中でしたが、第1日目の広島平和公園では青空が見え始め、第2日目の宮島から尾道方面では快晴と、まさにお天気に

恵まれました。幹事さん方は何かと気遣いされたことでしょ。報告記事12月号の予定。

10月30日 大倭紫陽花邑誕生七十年。昭和22年のこの日、法主様の一家が鳥見庄山から須加谷(地元の名目として菅谷と書く)の現在の紫陽花邑の地に移られた記念日です。

10月31日 午後2時から大倭病院の29年度中間決算報告会議が病院会議室で開かれました。
11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

11月8日 菅井勇紀さん(埼玉県入間郡越生町)が来邑。ゆう琴(遊琴とも書く)という珍しい弦楽器を製作・演奏される方。賑やかなの参加メンバーで岸田哲さんが邑や神宮を案内。交流の家で2泊して正倉院展では古楽器の箏篋を見学。
11月11日 拝殿で午後2時から宮崎賢氏(岡山市)を講師に迎えて大倭会文化講演会「ハンセン病の真実を追い続けて35年以上にわたる報道カメラマンとしての取材から」。当日は雨模様様の天気予報でしたが朝から次第に好天になり、参

加者は期待以上の50余名。今回のために編集してこられた映像は休憩をはさんで2時間、見ごたえのある内容となっております。大倭会館での懇親会にも35名ほどが参加。宮崎氏は大倭会館泊とあって、交流の家ホールに場所を移して二次会と続きました。報告記事1月号の予定。
大倭安宿苑では(菅原園)
10月2日 通所利用者の遠足で神戸どうぶつ王国へ。
10月17日 交流ホールにて衆議院選挙の不在者投票。(須加宮寮)
10月13日 書道クラブで難しい

言葉にも挑戦しました。
10月19日(特養)誕生会で6名(内卒寿と紀寿11百寿各1名)の方のお祝いをしました。
10月27日(デイ) 伏見中学職場体験実習の生徒さんも一緒にクレープを作りました。
10月31日 職員がハロウィンの仮装をして入居者におやつを配って回りました。
11月11日 定例懇談会。懇談会の後、秋晴れの天候に誘われ皆で散歩に出かけました。

10月19日(特養)誕生会で6名(内卒寿と紀寿11百寿各1名)の方のお祝いをしました。
10月27日(デイ) 伏見中学職場体験実習の生徒さんも一緒にクレープを作りました。
10月31日 職員がハロウィンの仮装をして入居者におやつを配って回りました。
11月11日 定例懇談会。懇談会の後、秋晴れの天候に誘われ皆で散歩に出かけました。

日聖祭(案内) 平成29年12月23日(祝)

大倭七十四年 元旦
法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。
午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。
○午後1時より、大倭会館で祝賀の会が催されます。直会弁当を頂きながら、直会演芸会として、隠し芸など披露して頂ける方を募っています。楽しいひと時を共にすごしましょう。

●12月15日まで受け付けています。
◆演芸会担当 中島武宣・青山法義(大倭印刷内)

TEL 〇七四二一四四一〇〇一 番
FAX 〇七四二一四四一〇〇九二 番

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)
12月4日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭については、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長留根邑のすめらみこと」等を読み、改めて「和の光」の心を自分のものとしたいものです。
*月次祭(大倭神宮)
12月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第587回視会
12月9日(土) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。なお、今年は土曜日に変わっておりますので、お間違いのなきよう、どうぞよろしくお願い致します。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。
*月次祭(大倭神宮)
12月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大本宮拝殿)及び直会演芸会
12月23日(祝)
大倭元旦。
上の「案内」をご覧下さい。
*大倭神宮境内・周辺大掃除
12月24日(日) 午前9時より有志の皆さんは参加下さい。昼食は用意されます。

12月24日(日) 午前9時より有志の皆さんは参加下さい。昼食は用意されます。